「『時』の打撃の下で」

—— “The New Dawn’s Business”、“Proud Songsters”、“Thoughts at Midnight” に読む詩人トマス・ハーディの「改善論」——

永　盛　明　美

はじめに

Winter Words in Various Moods and Metres（1928）は、世紀末を経て 20 世紀まで生きた詩人トマス・ハーディ（Thomas Hardy 1840-1928）の生涯最後の詩集である。詩集が刊行されたのは 1928 年 10 月 2 日のことである。同年 1 月 11 日にハーディは亡くなっているため、死後出版という形となる。ハーディが生前この詩集に寄せて書き残していた Introductory Note で、“So far as I am aware, I happen to be the only English poet who has brought out a new volume of his verse on his...birthday,...”（私の知る限りでは、私は偶然にも、自身の誕生日に新たな詩集を刊行した唯一の英国詩人である）と述べていることから、当初は自身の 88 回目の誕生日 1928 年 6 月 2 日に出版されることになっていたことがわかる。この詩集について、Vita Sackville-West からは「詩集でみられるのは、凝り固まった、不快なリューマチ症の言い回しであるが、それはハーディの世界には固有のものである」と評され、また他の批評家からはいくつかの詩は高く評価を受けたものの、その他についてはハーディの詩の才能は既に枯渇してしまったと評された。（Bailey 575）

しかし詩人は自身の死期を悟っていたこともあり、最後の詩集出版に関して Introductory Note に次のように述べている。

> As labels stick, I foresee readily enough that the same perennial inscription will be set on the following pages, and therefore take no trouble to argue on the proceeding, notwithstanding the surprises to which I could treat my critics by uncovering a place here and there to them in the volume. (*Winter Words*, Introductory Note)

> （[暗く悲観的だという] (1) レッテルが一度貼り付けられると、続くページに同一の碑文が刻まれるであろうことを、私は十分に予想している。それゆえに、私はその成り行きについ

てわざわざ異議を唱えたりはしない。だがしかし、この詩集のあちらこちらを明らかにして、批評家たちのどぎもをぬく料理に招待し、驚かせることができるのではあるが。）

このように序文において、ハーディらしい皮肉をこめた批評家たちへの宣戦布告が表明され、彼の最後の詩集は始まる。

その詩集の幕開けに、“The New Dawn's Business”、“Proud Songsters”、“Thoughts at Midnight” は置かれている。“The New Dawn's Business” は夜明けを舞台に、“Proud Songsters” は夕暮れを舞台に、“Thoughts at Midnight” は真夜中を舞台にした詩である。

1 番目の詩である “The New Dawn's Business” は、一日の始まりに行われる「仕事」について語り手と擬人化された「暁」の会話により構成される。「暁」は「時（Time）」の配下にあり、「明け方の仕事」を実際に行っているのは「時（Time）」であることが明かされる。

2 番目に配置される “Proud Songsters” は、囀る小鳥を「誇らしげに謳歌する歌い手たち」に見立てる。既に夕暮れへと時は経過しており、自然のあらゆるものの手を借りて生まれては死んでいく小鳥たちの姿が描かれる。その生命の流転の根底には、再び「時（Time）」の存在が示唆される。

次の “Thoughts at Midnight” では、詩人を重ねた語り手の思いが綴られる。この時さらに時刻は進み真夜中となる。小さきものである小鳥に焦点を当てた “Proud Songsters” とは対照的に、この詩の主題は人類である。語り手は自己反逆へと駆り立てられる人類へ失望する。それは人類の愚かさのためではなく、「時（Time）」の強大な力によるものである。失望しながらも人類を諦めたわけではない語り手は、最後に慈悲を求めて “God” と呼びかける。

3 篇は個々の独立した詩ではあるが、“Proud Songsters” を中心に繋ぎ合わせることで 1 日の時間の経過が浮かび上がる。各詩において一度ずつ大文字の “Time” が見られ、生と死と大文字の “Time” の関わり合いによって物語は展開される。

本稿の目的は、ハーディ最後の詩集 *Winter Words in Various Moods and Metres*（1928）より、“Proud Songsters” を中心に、”The New Dawn's Business”、”Thoughts at Midnight” における、後期の詩人ハーディの人生観の実像の一端を明らかにすることである。詩人が主張するのとは異なり、彼の作品に見られる人生観は「悲観論者」のものと考えられてきた（Sherman 23-42）[2]。ハーディ自身は「悲観論者」として弁明を行う一方で、自身を「改善論者（meliorist、social meliorist、evolutionary meliorist）」と呼びもする。既成の哲学や思想を学んだハーディは、生涯をかけて独自の人生観を作品世界に表現しようと試みた。死を前に提示されたハーディの人生への姿勢は、「悲観論者」などではない。同一の概念「時（Time）」により結び付けられた一見全く関わりのないような 3 篇の詩が示すのは、世の「改善」を心より希求する「改善論者」としてのそれなのである。

1. 詩人と暁－ “The New Dawn’s Business” 考－

“New Dawn’s Business” は *Winter Words* の第 1 番目の詩である。タイトルにある「暁」は、同時に詩集の「始まり」をも思わせる。初出は 1928 年 3 月 20 日出版の *The Daily Telegraph* であり、詩集も死後出版ではあるものの、ハーディは予め詩集の冒頭に “New Dawn’s Business” を置くことに決めていた。

タイトルともなり、詩の中でも大きな役割を担う暁のイメージは、ハーディがかねてより自身の人生哲学と関連付けてきたものであり、手記にみられる。

> Dawn. Lying just after waking. The sad possibilities of the future are more vivid then than at any other time…. The laughing child may have now a foretaste of his manhood’s glooms; the man, of the neglect and contumely which may wait on his old age. (*Personal Notebooks* 7)

> （暁。目覚めた直後、伏したまま。未来に嘆かわしい出来事が起こるやもしれぬ可能性は、いつ如何なる時よりも、暁においてより鮮烈である。楽しげな子どもは今や将来の深い悲しみを、また、彼が大人になれば、自身が老いたる時に待ち受けている周囲のおざなりな態度や傲慢な扱いを、暁の中に予感することだろう。）

この手記が書かれたのは 1871 年、*Winter Words* が出版される 60 年近く前のことである。ハーディは、暁の中で人生の不運や不幸をより強く意識すると、初期から記している。“The New Dawn’s Business” では生と死を暁と結び付けている。

この詩は語り手と、擬人化された「暁」との対話となっている。語り手は自身の周りに忍び寄る生と死の足音を感じ、「暁」に呼びかける。

What are you doing outside my walls,	我が家の壁の外であなたは何をしているのですか、
O Dawn of another day?	ああ、新たな日の夜明けよ。
I have not called you over the edge	荒野の岩棚の縁を越えよと、私はあなたに
Of the heathy ledge,	呼びかけたわけではないのに、
So why do you come this way,	どうしてあなたはやってくるのでしょう、
With your furtive footstep without sound here,	ここへ向かう足取りは密やかで音も無く
And your face so deedily gray? (1－7) [3]	こんなにも熱心に灰色の顔をして。

語り手が、家の外にいる誰か、つまり擬人化された「暁」に尋ねる。「彼」を呼んだ覚えのない語り手は、なぜ自身の元へと「彼」がやってくるのか見当もつかない様子である。1 行目から、まるでパズルであるかのように、4 歩格、3 歩格、4 歩格、2 歩格、3 歩格、4 歩格、3 歩格となり、

abccbdb と脚韻を踏む。語り手に迫り来る得体の知れない何かの存在を暗示しながらも、その語り口は諧謔的である。cc は内容と文法上の一致が見られるが、他の行では、b と脚韻を踏む行が 1 ～ 2 行おきに挿入される。b で締めくくられる各行を見てみると、2 行目はキーワードである “Dawn” があらわれ、問いかける相手の正体を示す。次に b となる 5 行目と 7 行目では、「暁」のやってくる様子が “deedily” と描かれる。語り手は「彼」の接近を強く感じているにもかかわらず、「暁」は未だ語り手の住まいの中にまでは到来しない。

語り手の問いかけに対し、第二連からは「暁」がその問いに返答する。

“I show a light for killing the man	あなたから遠くはない所に住む
Who lives not far from you,	あの男の命を奪うための光や、
And for bringing to birth the lady's child,	近くに住まうあの女の子どもに
Nigh domiciled,	命を与えるための光、
And for earthing a corpse or two,	また幾体かの死体を大地へ返すため
And for several other such odd jobs round here	そうした、「時」が今日せねばならぬ
That Time to-day must do. (8-14)	この辺りのその他諸々の雑役のための
	光を私は与えているのだ。

第 1 連と同様に abccbdb と韻を踏む。2 行目では “not far”、5 行目では “earthing corpse”、7 行目では大文字の “Time” が現れる。b の行に凝縮されている「暁」の所業、また 5 行目の死体を土に返すという表現は、「死」を支配するのは「暁」であるかのように思わせる。しかし 7 行目において、「暁」は命を与え奪うために光を提供する存在であって、“Time” がそれを司ることがわかる。1 日の中で、生と死をより明確にするのが、明け方なのである。

「時」という概念は、ハーディが学んだ思想家の一人ショーペンハウアーの哲学概念のひとつである。ショーペンハウアーは、“space”、“time”、“causality” が社会の根源であり、それらは「意志（will）」により社会へと影響をもたらすと考えた。彼の考える現象世界とは、抗うことのできない絶対的な意志の力の元で苦悩に満ちた救済されえない世界である。ハーディが詩人を志していた 1866 年に執筆された “Hap”（4）では、「神」を小文字で表記し、かわりに “Crass Casualty”、“Time”、“Doomsters” が「神のような」存在として描かれる。そのため “Hap” は若きハーディが「無神論者」であることや、ハーディとショーペンハウアーの思想との関連を示す詩作と言われる。“Hap” では「賽を振る『時』（dicing Time）」と表現される大文字の “Time” は、不幸を人間へもたらす。擬人化された「時」は、万物を、そして運命を司るひとつの強大な力を持つ存在である。

この「万物を司る時（Time）」と同じ性質を、“The New Dawn’s Business” における “Time”（14）も有す。ここでの大文字の “Time”（14）は、生と死を司る。8 行目の “I show a light” は、神の「光あれ」と言う一節を想起させる。それは「暁」、そして「暁」を従えている「時（Time）」が、

西洋の伝統の中での神の性質を備えていることの暗示である。「万物を司る時（Time）」は「暁」を従え、なさねばならない “Business” を行う。そして最終連では、さらに「暁」が次のように語る。

“But you he leaves alone (although,	けれども彼は君をおきざりにする。（君が
As you have often said,	常々言ってきたように、
You are always ready to pay the debt	君はいつだって忘れもせず、
You don't forget	食事や寝床のために借りている
You owe for board and bed) :	借金を払う心積もりはできているのだが）
The truth is, when men willing are found here	自ら進んで応じる人間がここで見つかれば、
He takes those loth instead.”	彼は代わりに気が進まないものたちを
（15-21）	連れ去るのが理なのだ。

“He” というのは言うまでもなく “Time” のことである。語り手の身近にあり、呼びもしないのにやってきた「万物を司る時」は語り手を連れ去りはしない。“Sound”（6）、“round”（13）、“found”（20）、と 6 行目、13 行目、20 行目の “here” が、より詩の諧謔性を増幅させる。第 3 連でも abccbdb と韻を踏み、b の脚韻の行が挿入されている。2 行目では、語り手が「返済」の準備、つまり「時」に与えられた命を明け渡す準備が自分にはできているのだと、しばしば口にしていたことが明かされる。

ここで第 1 連の夜明けに向かって「なぜ呼びもしないのにやって来るのか?」という問いかけが、実際には語り手自身の願望であったことが示される。“The debt”（17）には、本来は与えられはしなかったかもしれない命を借りているということの暗示がある。その借りのある相手とは、生と死を司る「時」である。キリスト教であれば天地をも創造した神であるところが、この詩においては “Time” であることが既に第二連で示される。7 行目では、語り手のかわりに、死にたいとは思っていない人を連れ去ることが読み取れ、挿入された b と脚韻する各行がハーディらしい皮肉な結末を予感させる。人間の思い通りにやって来はしない、気まぐれな「万物を司る時」。生きるも死ぬも人間の意志ではなく、「万物を司る時」の成さねばならぬ仕事によるものなのである。だが「彼」は単に命を与え、奪うだけではない。“Earthing a corpse or two”（12）とあるように、遺体を土塊へと還すのもまた彼の仕事の一環である。“The New Dawn's Business” において “Time” は「命」を司る。

2. 詩人と小鳥たちー “Proud Songsters” 考ー

Complete Poems では、*Winter Words* の最初の詩は 815 番 “The New Dawn’s Business” であり、次に 816 番 “Proud Songsters”、817 番 “Thoughts at Midnight” と続く。815 番は「夜明け（Dawn）」

がキーワードとなり、816 番では小鳥たちが夕暮れに囀り、817 番は真夜中に語り手が思いを馳せる。経過する「時」を 3 篇の詩に織り込み、それぞれ異なるテーマでありながらも、ひとつの構想を持つと考えられる。“Time” の概念を元に、ハーディ最後の詩集の幕開けを飾る 3 篇を貫く詩人の意図を読み解く。

“Proud Songsters” の初出は *The Daily Telegraph*（1928 年 4 月 9 日）である。内容に関しては、主として、詩で語られる「誇らしげに歌い上げるものたち」の在り様に生命の躍動と輪廻転生、大自然の偉大さが読み解かれてきた。2 連からなるこの詩は、囀る小鳥を「誇らしげに歌い上げるものたち」に見立てている。以下、第 1 連から、詩行を追いながら考察する。

The thrushes sing as the sun is going,	ツグミは太陽が沈むにつれて囀り、
And the finches whistle in ones and pairs,	フィンチは一羽や対で口笛を吹くように囀る、
And as it gets dark loud nightingales	空が暗がるにつれてナイチンゲールは
In bushes	茂みの中で
Pipe, as they can when April wears,	声高に歌い、4 月の終わりに力の限り、
As if all Time were theirs.	まるで「時」の全てが
(“Proud Songsters” 1-6)	彼らのものであるかのように。

ここでは、ツグミ、フィンチ、ナイチンゲールらが夕方に囀る様子が描かれる。連全体を通して短い音節の単語で構成され、s や t、p、sh、ch、wh、などの空気を発する音が多く使用され、あたかも鳥たちが囀るかのようである。ミルトン（John Milton, 1608-1674）も詩に詠んだように、ナイチンゲールは夜の鳥として有名だが、ツグミやフィンチは明るいうちにも囀る小鳥である。そのため、第一連でしきりに夕暮れ時の小鳥たちの様子を描写していることに、読者は興味を抱く。とりわけ日の暮れかかった情景の中のツグミは、ハーディの代表的詩作のひとつ、“The Darkling Thrush"（*Past and Present* 1900）のそれを想起させる。しかし、これほど小鳥たちが各々囀る様子を伝えていながら、第一連の最後には、“As if all Time were theirs.”（6）と締めくくられる。まるで実際にはそうではないことを知らしめるかのように。

第 1 連の最終行で、“Time”（6）が大文字になっていることに注目したい。単に「時間」という意味であれば、小文字表記でも良かったはずであるが、それにもかかわらず、なぜハーディはこの詩に大文字の “Time” を記したのか。

この “Time” には、刻々と過ぎ去る「時間」の意味とともに、それが万物を動かす世界の大きな「力」のひとつとしてあると信じたハーディの哲学的概念が示されているのではないか。それはキリスト教の「神」ではない。人間とは異なり何にもとらわれることのない小鳥たちですらも、死すべき運命は免れることはできない。「万物を司る時」のもとでは命を与え奪う対象のひとつに過ぎないことを、第一連の最終行において詩人は示唆する。

こうした第 1 連を受け、第 2 連では、小鳥はもはや囀らない。かわって、書き手を想起させる

語り手が、先ほどまで各々誇らしげに歌っていた小鳥たちについて語り始める。

These are brand new birds of	こうした鳥たちは、生後 12 ヶ月の
twelvemonths' growing,	生まれたばかりの小鳥たちだ、
Which a year ago, or less than twain,	彼らは 1 年前、あるいは 2 年もしないうちは、
No finches were, nor nightingales,	フィンチでもナイチンゲールでも
Nor thrushes,	ツグミでもなく、
But only particle of grain,	ほんのわずかの粒子でしかなかった、それは
And earth and air and rain. (7-12)	また大地でもあり、大気でも、雨でもあった。

そして、第 1 連で耳に残っていた鳥のさえずりを連想させるような音も見られない。目の前の小鳥たちは、もとは “grain” であり、“earth” であり、“air” であり、“rain” であったのだと、生命の誕生や成長への感動が抑揚のきいた口調で語られる。語り手は小さな鳥たちの中に、それらを生み出した万物の偉大さを見る。これに関し Dorothy Hoare は次のように述べる。

> Behind its apparent simplicity is…; a feeling of pity and tenderness for the creatures momentarily so vital, as if all time were theirs, when the irony is…the fact…that they are unconscious of the dusty end which awaits them; and, surprisingly, a hint, since earth and air and rain are integral elements for life, of the miraculous re-birth from nothingness.” (Hoare 119)
>
> （一見単純に見える簡潔さの後ろにはまるで、時のすべてが彼らのものであるかのような、つかの間ではあるが、こんなにも生き生きとした生物たちへの哀れみとやさしさの感情がある。しかしその際、彼らが自身を待ち受けている塵と化す命の終末に無自覚であるという事実は皮肉なことだ。また、大地や大気や雨は生命にとって不可欠であるために、何もないところから奇跡のように生命が生まれ変わるというひとつの暗示もそこに存在しているというのは、驚くべきことである。）

第二連に関しては、Pritchard も “only”（11）に着目し、“…, ending up with an ‘only’-‘only particles’-that leaves us to do what we will with the miracle of life and its evanescence,…. (Pritchard 71)（“only”、つまり、“only particles” の “only” で締めくくられる。この “only” は、私たちに生命の奇跡とそのはかなさを前にして、我々がやるであろうことをしたいようにするだけだ。）と、人間たちにも命を無駄にすることなく生きよと述べる。

しかしながら、この詩にこめられるのは、単に万物の偉大さや生命の儚さのことだけではない。語り手の目の前で誇らしげに旋律を奏でる歌い手たちは、彼らの親鳥そのまた親鳥そしてそのま

た親鳥、というように際限なく紡がれてきた命のサイクルの一部でしかない。彼らが我が物顔で声高に囀るのは、先祖から脈々と受け継がれてきた命あってのことなのである。彼らは粒子や、大地、大気、雨の恩恵によって生まれ出てきたために今また生きる。小鳥たちを前に語り手は、小鳥たちの祖先に、彼らを育んできた自然界に思いを馳せる。“As if all Time were theirs.”（6）という一行は、「命」を得て生まれてきたはずのあらゆる小鳥たちが、個として存在するのみでないと告げる。

また粒子や大地、大気や雨は、同時に、語り手の目の前にいる小鳥たちの死した後の姿でもある。そうして「塵と化した」小鳥たちと入れ替わるように、“brand-new birds”（7）が粒子により生み出される。詩のタイトルが無冠詞であるため、目の前にいる特定の小鳥たちのみならず、鳥の種族全体が “Proud Songsters” なのである。

“…he [Hardy] recognises that the humblest creatures may have insights beyond the reach of human senses and intellect. (Pinion, 9) ”（彼は、最も下等な生物が人間の認識力と知力の及ばない洞察力を兼ね備えているということもありうるのだと知っているのだ。）と Pinion が指摘するように、ハーディは小鳥に特別な関心を示し、韻文・散文問わず作品世界に取り入れた。瀧山も「彼は忍耐強く細密に鳥を観察した。そして、鳥の鳴き声、習性などに魅せられる以前に、生の受難者としての彼らの立場に関心を示した。出発点におけるこの博愛的な姿勢が彼の鳥の詩に独自の光を投じている。」（瀧山 28）と述べ、Butler も鳥というモチーフがハーディにとって特別な意味を持った存在であったことを指摘する。

“Proud Songsters” における小鳥たちと大文字の “Time” との関係により、自然の壮大さと小鳥の矮小さ、“Time” の強大さと小鳥の弱小さが浮かび上がる。同時に “The New Dawn’s Business” から引き継がれる人間世界での生と死と「時」のテーマは、“Proud Songsters” へと同様のテーマを引き継ぐことにより、人間と小鳥との対比を作り出す。小鳥たちは与えられた命を謳歌し、命ある限り誇り高く囀るにもかかわらず、人間とりわけ “The New Dawn’s Business” の語り手は死を待つばかりである。

小鳥たちの命は、自然界のあらゆるものの力を借り、たくましく受け継がれて行く。はじめ「粒子（grain）」であったそれは小鳥の姿となり、「穀物（grain）」を啄ばみ、死した後には再び「粒子（grain）」へと姿を変える。“Earth”（12）は “The New Dawn’s Business” で “Time” が死体を土へと還すと「暁」が語る箇所を想起させる。小鳥たちを生む “earth” の中には、「暁」により大地へと還った人間も含まれる。止むことなく繰り返されるその命の循環の中には、小さきものの儚さとそれらを生み育む自然の偉大さが讃えられる一方で、自然と一体となって永遠に絶えることのない鳥という種族のたくましさがある。語り手は、鳥という種族を一例にして浮かび上がる、形を変えながら受け継がれ続ける生命の永続性をも詩行に織り込んでいるのである。

そうした命の輪廻の根底に流れるのが、“Time” である。自然界の命をも統括する “Time” の上に、自然界の力を借りて、ひとつの命が生み出される。あらゆる生命は “Time” が司る。“The New Dawn’s Business” では人間が、”Proud Songsters” では小鳥が、「時」により命を与えられ、そし

て奪われる。

3. 詩人とその思い—“Thoughts at Midnight” 考

この詩に付されている 1906 年は、詩人が人生をかけて取り組んだ長編叙事詩劇 *The Dynasts*（1903-8）の第二部が出版された年である。この詩は、津久井が明らかにするようにマニュスクリプトと出版後の詩の形式において相違が見られる。(5) 全体の詩行がマニュスクリプトでは斜形に配置されていたが、マクミラン版では左端は第 1 行目から最終行まで揃えられている他、語句や記号に至るまで手を加えられた箇所があるため、マニュスクリプトとの比較も行いながら “Thoughts at Midnight” と先述の 2 篇との関連について考察する。時は真夜中となり、語り手は人間や死について考える。本来は全 27 行全てが一連となっているのだが、まずは前半の 13 行目までの内容を見ていくこととする。

Mankind, you dismay me	人類よ、君たちは私を失望させる、
When shadows waylay me! -	影が私を襲うときに！
Not by your splendours	君たちが私を怯えさせるのは、
Do you affray me,	君たちの派手やかさによるものでも、
Not as pretenders	君たちが悪魔のような鋭さの
To demonic keenness,	詐称者であるからでも、
Not by your meanness,	君たちの卑しさのためでも、
Nor your ill-teachings,	不完全な教えによるものでも、
Nor your false preachings,	誤った説教によるものでも、
Nor your banalities	陳腐な考えや不道徳でもなく、
And immoralities,	君たちの向こう見ずさや
Nor by your daring	悪意のある
Nor sinister bearing; (1-13)	振る舞いによるものでもない

人類よ、と語り手は呼びかける。まるで語り手自身はその一員ではないかのように、人類が自分を失望させると述べる様子は唐突である。その唐突さは、aababccddeeff とカプレットのように韻を踏む 3 行目～5 行目の脚韻が bab となることや、これから語ろうとする内容の深刻さとは裏腹に、3 行目以降から冗長な言葉の運びとなることから、“The New Dawn’s Business” で見せた諧謔性へと姿を変える。韻律に関しても各行末を弱で終え、滑稽さを添える。マニュスクリプトと比較すると、4 行目は後に挿入された行であり、詩人が敢えて bab の不調和を作り出したことがわかる。その一方で、6 行目以降は規則的にカプレットの形式に則り、刻むような韻の踏み方と、13 行目までがコンマで一続きになっている言葉の運びからは、深夜に語り手が目の前の

世界へと次々に思いをめぐらせている様子が窺える。4行目のコロンと6行目の行末に置かれていたセミコロンは、両者共にコンマに書き換えられ、深夜に次々に思いをめぐらす語り手の姿を想起させる。語り手の “Thoughts” の深刻さとは裏腹に、こうした形式は内容に見合う深刻さや重々しさを感じさせず、むしろ滑稽感すらただよう。

“Proud Songsters” から時はさらに経過し、既に真夜中である。“Thoughts at Midnight” には “Proud Songsters” で語り手が触れた奇跡とは対照的な人類の姿がある。語り手が思いを巡らす人類の救いようのなさは、直前に歌われた小鳥たちとの対比により、いっそう強調される。また “The New Dawn’s Business” と “Thoughts at Midnight” には明と暗のコントラストが生まれ、明である “The New Dawn’s Business” では命を与えていた「時」は、“Thoughts at Midnight” ではもはや命を与えはしない。

2行目の「影」とは、舞台となる夜のことであり、同時に詩人を重ねた語り手の人生が終わりにさし掛かっていることを表す。死期が迫り来ることを悟った語り手は、人間への失望のわけを、否定の表現を用いながら挙げ連ねていく。語り手は、「そうではない」と否定しながらも、人間を必要以上に華美で卑しくうそつきな不道徳者と考えている。“Demonic” や “false” という悪意を思わせる強い言葉が、語り手の抱く人間への懐疑を強める。

しかしこうした語り手の人間への解釈とはまた別の理由で、彼が希望を失っていることが後半で語られる。

But by your madness	それは、「時を司る神」のもたらす打撃の元
Capping cool badnesses,	で、操り人形のように
Acting like puppets	振舞うあつかましい悪行を
Under Time's buffets;	凌駕する君たちの狂気によるものである。
In superstitions	英知にも、
And ambitions	先見の明にも、
Moved by no wisdom,	秩序にも動かされない
Far-sight or system,	迷信と野心において、
Led by sheer senselessness	全くの無分別かつ
And presciencelessness	洞察力のなさにより、
Into unreason	理性を失い、おぞましい自己反逆へと
And hideous self-treason....	導かれることによるものだ。
God, look he on you,	神よ、彼が君たちを見、
Have mercy upon you! (14-27)	慈悲を与えますように。

gghhiijjcckkll と韻を踏む後半は、前半の bab とカプレットの形式にそぐわない3行目から5行目とは異なり、まるで主張の論理性や妥当性を示すかのようにカプレットの形式が守られる。脚

韻が a となる 1、2、4 行目は “me” で終わるが、最後の脚韻 1 では “you”、つまり人間が強調される。まるで、語り手と詩の冒頭で呼びかけた “Mankind” とは一線を画していることを示しているかのようである。祈願文の最後の 2 行を除いて、後半に入っても、脚韻部分には 2 音節以上の語を用いながら滑稽さを保ち続ける。

“Not”、“Nor” を用いて否定を重ねた前半とは打って変わって、後半ではもはや否定で行を始めることはない。語り手は、人類が彼を失望させ、また狼狽させる原因を断言する準備をはじめているのである。16 行目から 17 行目にかけての “Acting like puppets / Under Time’s buffets” という語り手の人類の解釈は、詩人ハーディの、人間とあらゆるものを支配する盲目的な「内在意思（Immanent Will）」の解釈そのものである。Immanent Will を想起させる大文字の “Time”、つまり「万物を司る時」は人間を操り、それにより人間はあつかましい悪行を内に秘め、それを凌ぐのは人類の狂気である。そうするようにと人類を動かす「時」の “buffets” は、一撃ではない。「万物を司る時」によりもたらされる不運、不幸、そして人間たちを愚かな振る舞いへと駆り立てる強大な力は、幾度にも渡り人間に降りかかるのである。分別も洞察力もなく、理性を失い、人間たちが自己へと反逆するよう「時」により導かれることこそが、語り手に人類という存在を失望させ、狼狽させる原因なのだ。

そうではあるが、語り手の “Thoughts” を辿ってみると、20 行目から 21 行目では、人類の愚行を蔑む一方で、人間には英知や先見の明や秩序があるのだと認めていることも伺える。語り手は、人類そのものが愚かな存在であるとは語っていない。彼らが自己反逆を行う理由はただ 1 つ、「『時』の打撃」により、そうせざるをえないよう突き動かされているからだ。彼は、強大な「時」の力の元では為す術のない人間という存在を、諦めたわけではないのである。だからこそ、語り手は請う。“God”（26）と呼びかけて。

25 行目の 4 つのドットからは、人類の自己反逆に悲劇性を感じる語り手の溜め息が聞こえてくる。語り手は真夜中に “Thoughts” を吐き出せるだけ吐き出した後、大きな吐息を漏らし、「時」の力に抗おうと遂には “God”（26）に懇願する。25 行目まで執拗に繰り返されてきた「おふざけ感」を助長する長音節の脚韻はもはやそこにはなく、最初の 2 行、最後の 2 行は共に強で締めくくられ、韻律上の諧謔性もない。ここまで 2 音節以上の語を多用されてきた詩行が、最後の 2 行で突如として表れる単音節の言葉の存在を一際強調する。そうして強められた単音節の集合体は、その中に再び組み込まれた 2 音節の “mercy” をいっそう引き立てる。最終 2 行に細心の注意を払いながら、語り手は、まずは人類をしかと見てもらい、そして反逆へ向かう人類へと慈悲を与えるよう、願うのである。

では、語り手が慈悲を請うている相手とは、いったい誰なのか。その “God”（26）とは、キリスト教の神か。ここに語り手の、そして語り手を重ねた詩人ハーディの、態度を決めかねているさまが浮き彫りになる。大文字の “God” は、英詩の伝統により行のはじめであることによるのか、それとも、この執筆時期に彼はキリスト教の神を自身の神とするようになっていたのか。推測の域を出ないが、皮肉屋のハーディらしく「有神論」「無神論」について考えさせるべく行ったの

であろうか。しかしこの詩の中で、彼の信じたものがいかなるる「神」であろうとも、慈悲を与える神が描かれているため、慈悲深いキリスト教の「愛なる神」を念頭に置いているであろうということは確かである。

"Thoughts at Midnight" における大文字の "Time" は、ハーディが初期に発表した "Hap" の "dicing Time" と重なる。前 2 篇を通して明かされた「時」は、人間を含めた自然という大きな枠組みの中で命を与え奪う。そして "Thoughts at Midnight" の "Time" は「打撃」という形で「あたかも操り人形であるかのように」人類を操るのである。3 篇を通して描かれた大文字の "Time" は「万物を司る時」であり、"The New Dawn's Business"、"Proud Songsters"、"Thoughts at Midnight" はこの「万物を司る時（Time）」により貫かれている。

4. 詩人と悲観論／改善論－続 "Thoughts at Midnight" 考

"Thoughts at Midnight" で示されるハーディの "Thoughts" は、彼が 48 歳、まだ小説家であった 1889 年 4 月 7 日の手記に示されるものとは異なる性質を持つ。

> A woeful fact—that the human race is too extremely developed for its corporeal conditions, the nerves being evolved to an activity abnormal in such an environment. [⋯] This planet does not supply the materials for happiness to higher existences." (*LW*, 227)

> （嘆かわしい事実である。人間という種族が、肉体的条件には耐えられないほどあまりにも発展しすぎ、このような環境では異常といえる働きへと神経が過敏になってしまっている、ということが。[中略] この星は、より高等な生物に幸福になるための、物質を与えはしないのだ。）

ハーディは、ヴィクトリア朝における科学の発展に伴い増大する人間の欲を "woeful fact" と語る。この時の小説家ハーディは事実を嘆くのみで、そこに「改善」を求めて手を伸ばす姿勢はない。

一方で、自己反逆へと向かう人類を諦めることなく、慈悲を請う "Thoughts at Midnight" の語り手の姿は、「改善論者（Meliorist）」としての詩人の姿そのものである。1918 年 9 月の世界情勢の混乱の際にハーディが手記に記した、"However, as a meliorist（not a pessimist as they say）I think better of the world."（*Life* 397）（しかし、人が言うような悲観論者ではなく、改善論者として、私は世の中に関して、より良いものと考えている）という記述は、「改善論者」としてのハーディが "Thoughts at Midnight" の執筆時も同様の思いを持っていたことを示唆する。語り手は真夜中に人類へ失望するのではなく、慈悲を願い、人類をより良くする「改善論者」として人類を見つめている。

1922 年発表の詩集 *From Late Lyrics and Earlier* の序文である "Apology" の中で、"In

Tenebris” でも示された次の一節を、詩人は再び引用している。

> If way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst. (“Apology” 557)
>
> （もしもよりよくする方法があるのなら、それには最悪のものを真正面から見ることが要される）

物書きの仕事の本質を精巧な “observation” に見出したハーディは、「より良い状態」を求めてやまなかった。また、先に引用した序文 “Apology” には、以下のような続きがある。

> It may indeed be a forlorn hope, a mere dream, that of an alliance between religion, which must be retained unless the world is to perish, and complete rationality, which must come, unless also the world is to perish, by means of the interfusing effect of poetry—‘the breath and finer spirit of all knowledge; the impassioned expression of science’, as it was defined by an English poet who was quite orthodox in his ideas. But if it be true, as Comte argued, that advance is never in a straight line, but in a looped orbit, we may, in the aforesaid ominous moving backward, be doing it *pour mieux sauter*, drawing back for a spring. I repeat that I forlornly hope so, notwithstanding the supercilious regard of hope by Schopenhauer, von Hartmann, and other philosophers down to Einstein who have my respect. (Apology 561-2)
>
> （もしも世界が滅んではならぬというのなら、ぜひ保持されるべき宗教と、これもまた世界が滅んではならぬというのなら、ぜひ達成されるべきである完全な合理性との協調を期待するのは、他の誰も持たない望み、全くの夢に過ぎないかもしれない。それは、きわめて正統的な考えをもった１人の英国の詩人によって定義されたように、「全ての知識の息吹や、よりすぐれた精神、また知の熱のこもった表現」(6) である詩の浸透効果によってもたらされるだろう。しかし、もしもコントが主張したように、進歩とは決して直線ではなく、輪を描いて進む軌道であるということが事実であるならば、私たちは前述の不吉な後退運動において、よりよく飛躍するためにそうしている、つまり、跳躍のために後退しているのかもしれない。私の尊敬するショーペンハウアーやフォン・ハルトマン、アイシュタインに至る他の哲学者たちの、希望をさげすむような見方にも関わらず、私は孤立無援でもそう（＝宗教と合理性とが同盟することを）期待する、と繰り返して言おう。）

「弁明」とタイトルのつけられたこの序文でハーディは、7ページにわたり自身の詩作への思いと人生観を綴る。敢えてハーディが長い「弁明」をしたことからも、この序文は自身が「改善論者」であるという意思の表明と捉えることが出来よう。81歳の詩人ハーディは、間違いなく、「悲

観論者」などではない。“Thoughts at Midnight” において “Time” のもとで自己反逆へ向かう人類をより良くするべく慈悲を請う語り手の姿が、すでに “Apology” の中に見られる。

同詩集の最後から 2 番目のソネット “We Are Getting to the End” では、“Thoughts at Midnight” で語り手の語った思いがさらに言葉を変えて繰り返される。“We Are Getting to the End” の次の詩、つまりこの詩集の最後の詩が、“He Resolves to Say No More” であることからも、詩集に表明された詩人の思想は “We Are Getting to the End” までで終局するものであり、十二分に自身の意思表示をしたのであるから、詩人はもはやこれ以上のことを言うまいとしているのである。この詩の中で語り手は第二次世界大戦を予感し、人類を闘争へと駆り立てるのは “some demonic force” であると述べる。はじめの連に、語り手の「改善論者」としての姿が見られる。

We are getting to the end of visioning	この宇宙においては不可能なことを、
The impossible within this universe,	私たちが夢想するのはそろそろ終わりだ
Such as that better whiles may follow worse,	より良い時がより悪い時の後に
	来るかもしれないとか、
And that our race may mend	私たち人類が論証によって
by reasoning. (1-4)	改善されるかもしれないとか。

語り手は、「我々」は夢想することを止めなければならない段階にいるのだと言う。タイトルにある「終わりに差し掛かる」というのは、詩集が終わりに差し掛かっているのと同時に、語り手の一連の着想の表明が終わりに差し掛かっていることを示す。詩人は現実から目を背けるかのような根拠の無い「夢想」をやめ、人間の実態を “observe” するようにと言う。彼は同じ悲劇を繰り返す人間の愚かさを嘆きながらも、その現実を認めた上で「我々」人類の力で現実に立ち向かわねばならないのだと主張しているのである。“Apology” で提示された “If way to the Better there be, it exacts a full look at the Worst.” (“Apology” 557) と同様の考えを示しながら、彼は終局へと向かう人類へ警鐘を鳴らしているのである。

“We Are Getting to the End” の語り手は、“Thoughts at Midnight” で自身を人類とは別の存在のように考えていたその人物と、もはや別人のようである。詩集の始まりに 3 詩をひとつの構想としその最後に置かれた “Thoughts at Midnight” と、文字通り詩集の終局に差し掛かって置かれた “We Are Getting to the End” において、語り手は、「改善論者」ハーディの人類への姿勢を明らかにする。はじめは人類と隔たっていた語り手は、ついには自身が人類の一員であることを自覚し、「我々」人類の改善を願う。詩人ハーディの最後の詩集の幕開けに提示された「改善論者」としての彼の人類への「改善」を希求する姿は、詩集最後にも示唆されるものであった。

おわりに

死を前にした詩人トマス・ハーディは、自身最後の詩集の幕開けとともに、長年にわたり育んできた人生観を3篇の詩に吹き込んだ。それぞれ大文字の "Time" が支配するその3篇を通し、詩人は、生、死、そして生命について、私たちに訴える。

"The New Dawn's Business" では、大文字の "Time"「万物を司る時」の性質を明かす。「時」が生業としているのは、命を与え奪うことである。ここで命を与え奪われるのは人間である。詩人がかねてより関心を示していた明け方という時間設定は、この詩において詩集の始まりと詩人の人生観の表明の始まりを表す。

そして夕暮れの "Proud Songsters" では、自然界の命の輪廻の中に生まれ塵と化す小鳥たちの儚い生命と、その裏側で受け継がれ続ける鳥という種族のたくましさを詠う。命のサイクルを支配するのはここでもまた「時」であり、詩人の強い思い入れのあった鳥でさえも「時」のもとで生まれては死ぬ。"Proud Songsters" を通して、「時」は人間のみならず動物や自然でさえも支配し、自然界の根底を支える強大な力であることを示唆する。この詩が "The New Dawn's Business" の後に挿入されることにより、人間と小鳥、人間と自然の対比が生まれ、大文字の "Time" の強大さがより鮮明となる。

詩人自身とほとんど等しい語り手が現れる "Thoughts at Midnight" において、語り手は、真夜中に人類の愚行に思いを巡らせる。真夜中という時間は、3篇の詩を通してひとつの体系となった詩人ハーディの思想の終焉を表す。"Proud Songsters" における小鳥とそれを育む自然との対照により、人間の自己反逆のさまが浮き彫りとなる。「時」の元で自己反逆の道を辿ることしかできない人類に詩人は失望するが、彼は決して人類を諦めたのではない。「神」に慈悲を願う語り手の姿は、「改善論者」としてのそれである。同様の語り手の姿は、詩集の最後から2番目の詩 "We Are Getting to the End" でも見られる。"Thoughts at Midnight" に提示された語り手の人類への "Thoughts" は、"We Are Getting to the End" に見られるように、詩集の終局にも示されるものである。

"Time" によって貫かれた3篇 "The New Dawn's Business"、"Proud Songsters"、"Thoughts at Midnight" において示されるのは、死を前にしたトマス・ハーディの「悲観論」ではない。3篇をひとつの体系とすることで、詩人は "Time" とそれに抗う自身の「改善論」を表明しようと試みる。「改善論者」としての詩人の姿勢は、自身最後の詩集に提示されている。

注

（1） ハーディの作品には、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer 1788-1860）の哲学が色濃く反映されていると言われる。彼の著書に学んだことがハーディの手記で明かされハーディの作品からその影響が窺えたため、作家トマス・ハーディは長年「悲観論者」であるとされてきた。

（2） *Winter Words* の前の詩集 *From Human Shows, Far Fantasies, Songs and Trifles*（1925）が出版された際、評価が低く酷評されたことを、序文でこのように述べていると考えられる。

（3） Thomas Hardy, *The Complete Poems*. (Ed. James Gibson. London: Macmillan, 2002) 835.

なお、拙稿におけるハーディの詩の引用はすべて同書による。

（4） ハーディの処女詩集 *From Wessex Poems and Other Verses* (1898) に所収される。作品自体は 26 歳の時に執筆され、無意識な「内在意志（Immanent Will）」の思想の原形とされる。

（5） 津久井はマニュスクリプトとマクミラン版との形式面での相違を明らかにしているが、拙稿で典拠としている *Complete Poems* も Palgrave Macmillan により出版されているため、津久井氏の研究に拠った。

（6） *Lyrical Ballads* の Preface からの引用にハーディが手を加えたものである。元の Preface では、“it is the impassioned expression which is in the countenance of all Science.（すべての知の顔にやどる熱のこもった表情）とある。

引用・参考文献

Armstrong, Tim, et al. ed. *Thomas Hardy: Selected Poems*. New York: Longman, 2009.

Bateson, F. W. “Poems in Uncertain Words: The Hardy Problem.” *Thomas Hardy; The Poetry of Perception*. Ed. Tom, Paulin. New York: Macmillan, 1976.

Bailey, J. O. *The Poetry of Thomas Hardy*. North Carolina: North Carolina UP, 1970.

Butler, Lance St. John. ed. "The Ranging Vision,” *Thomas Hardy After Fifty Years*. London: Macmillan, 1978.

Devries, David. “Spiritual Cleansing” ＜ http://coyote.csusm.edu/pipermai/ttha—potm/2007—July/00325.html ＞

Hardy, Florence Emily. *The Later Years of Thomas Hardy*. New York: Macmillan, 1930.

Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate. London: Macmillan, 1984.

—. *The Complete Poems*. Ed. James Gibson. London: Macmillan, 2002.

—, and Taylor, Richard Hyde. *The Personal Notebooks of Thomas Hardy: With an Appendix Including the Unpublished Passages in the Original Typescripts of the Life of Thomas Hardy.* New York: Columbia UP, 1979.

Hawkins, Desmond. “Necessity and Possibility,” *Hardy: Novelist and Poet*. London: Latimer Trend & Company Ltd, 1976.

Hearn, Lafcadio. *Interpretations of Literature*. New York: Dodd, Mead, 1915.

Irwin, Michael. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. London: Wordsworth Literary Lives, 2007.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*. New York: Oxford UP, 1982.

—. *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. New York: Oxford UP, 2006.

Paulin, Tom. “Observations of Fact.” *Critical Essays on Thomas Hardy’s Poetry*. Ed. Harold Orel. New York: Macmillan, 1995.

Pritchard, William H. “Hardy’s Winter Words.” *Critical Essays on Thomas Hardy's Poetry*. Ed. Harold Orel. New York: G.K. Hall, 1995. 47-71.

Richardson, James. “Novelist into Poet 1896-1907,” *Thomas Hardy: The Poetry of Necessity*. Chicago: The U of Chicago, 1977.

Schweik, Robert. "The Influence of Religion, Science, and Philosophy on Hardy's Writings." *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*. Ed. Dale Kramer. Cambridge: Cambridge UP, 1999.

Sherman, G. W. “A Critic of a Critic.” *The Pessimism of Thomas Hardy*. Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1976.

Shires, Linda. “Hardy and Nineteenth-century Poetry,” *Palgrave Advances in Thomas Hardy Studies*. Ed. Phillip Mallett. New York: Palgrave Macmillan, 2004.

Simoniti, Vid. “Schopenhauer on the Epistemological Value of Art.” *Postgraduate Journal of Aesthetics*, Vol 5,

No. 3, December 2008.

Southworth, James Granville. *The Poetry of Thomas Hardy.* New York: Columbia UP, 1966.

Wordsworth, William, Samuel Taylor Coleridge, and Derek Roper eds. *Lyrical Ballads 1085*. London: Coolins , 1968

鎌田康男 「ペシミズムとキリスト教」『ショーペンハウアー読本』 法政大学出版局 2007 219頁～228頁。

高橋陽一郎 「芸術としての哲学―芸術と学問との狭間で」『ショーペンハウアー読本』法政大学出版局 2007 192頁～ 204頁。

瀧山季乃 『詩人トマス・ハーディ』 篠崎書林 1972。

津久井良充 「調査研究―オースティン、フォースター、ハーディらのマニュスクリプトについて」、『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第1巻 第2号 1998年12月 189頁～ 195頁。